研究ノート

光源氏――語りの伝統と創造――

上野辰義

〔抄録〕

源氏物語の主人公光源氏は、作り物語の語りの伝統の中から生まれながら、物語内の彼の独自の人生を歩むことで、伝統から抜け出し、物語史の新たな創造を成し遂げてきたが、一族に「おごる」ことを戒めるのも、その一つと思われる。その包括的な検討の土台として、「おごり」と「おごり」の教訓の歴史と位相について、考えた。

キーワード　源氏物語、光源氏、おごり、藤裏葉巻、和漢比較

一　問題の所在

光源氏は、物語文学をはじめとした語りの伝統と創造の中にいる。例えば、

前の世にも、御契りや深かりけむ、世になくきよらなる玉のをのこ御子さへ生まれたまひぬ。（桐壺）[1]

という誕生の様からしてそうだ。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

（竹取物語）

殊に悩むこともなくて、玉光り輝く男を生みつ。…。この子養ひもてゆくまゝに、玉光り輝きて見ゆれば　（うつほ物語俊蔭）

十六歳といふ年の五月五日に、玉光輝きたるをとこの、いとをかしげなるを生み給へり。名をば忠こそといふ。

（うつほ物語忠こそ）

物語史での位置、作品の性格の違いによって、その様相は異なるが、主人公が光り輝く容貌をもって生まれ、優れた資質を備えているという具合に。

だが、源氏物語は、竹取物語のヒロインかぐや姫が、「きと影になり」、「月の都」に飛ぶ「車に乗りて、百人ばかり天人具して昇」っていくような伝承性の強い時代から、冥々の力や物の怪の跋扈が語られながらも、当時の社会心理や、人間心理のありように沿って、それらが描かれる、時代の「現実性」を重視する段階に入っている。これはある意味、源氏物語作者の創造、到達点でもあるのだが、こうした、源氏物語作者による、物語の伝統を突き破る創造の一つが、一族に「おごり」をいさめる光源氏の姿ではないかと思われる。翌年は四十歳となり、長寿の祝いである算賀の奉献も予想される三十九歳の光源氏は、まず、息子の夕霧に、雲居雁との結婚問題に関わって、次のような教訓をしていた。

位浅くなにとなき身のほど、うちとけ、心のままなるふるまひなどものせらるな。心おのづからおごりぬれば、思ひしづむべきくさはひなき時、女のことにてなむ、かしこき人、昔も乱るる例ありける。（梅枝）

大臣の御掟てのあまりすくみて、なごりなくくづほれたまひぬるを、世人も言ひ出る事あらむや。さりとても、わがかたたけう思ひ顔に、心おごりして、すきずきしき心ばへなど漏らし給ふな。さこそおいらかに大きなる心掟てと見ゆれど、下の心ばへををしからず癖ありて、人見えにくきところつき給へる人なり。（藤裏葉）

結婚前も結婚後も、「心おごり」して女性問題を起こすなというのである。「心おごり」が、「心おのづからおご」ることであるのは、この梅枝例で明らかだろう。また、最愛の妻紫上にも、彼女が、みあれに詣でた翌日、賀茂祭の「かへさ」の桟敷で、見物の威儀を正して、光源氏の第一婦人としての存在を顕わにしている様から、昔の車争いの事件を想起して、次のように語る。

「時に寄る心おごりして、さやうなることなん、なさけなき事なりける。こよなく思ひ消ちたりし人も、嘆き負ふやうにて亡くなりにき」と、そのほどはの給ひ消ちて、「残りとまれる人の、中将はかくただ人にて、わづかになりのぼるめり。宮はならびなき筋にておはするも、思へばいとこそあはれなれ。すべていとさだめなき世なればこそ、なに事も思ふままにて、生ける限りの世を過ぐさまほしけれど、残りたまはむ末の世などの、たとしへなき衰へなどをさへ、思ひはばからるれば」とうち語らひ給ひて、（藤裏葉）

無常の世ゆえ、光源氏没後の、紫上の衰退が心配だから、生前の行動を慎まねば、と、「心おごり」の抑制をうながすメッセージを間接的に、彼女に伝えた。[2]

また、娘明石の姫にも、その場で「心おごり」の語は使っていないが、梅枝巻で、明石姫入内の調度の絵の中に、

かの須磨の日記は、末にも伝へ知らせむとおぼせど、今少し世をもおぼし知りなんにとおぼしかへして、まだ取りいで給はず。（梅枝）

としたのも、姫君の心おごりを抑制するために、須磨の絵日記を活用する最善の時期を探った判断とみられる。実際、明石姫は、この須磨

の日記ではないが、後に、祖父明石入道の手紙を見て、自らの「心おごり」を自省する。そのようなことができる境遇ではなかったのだと。

心のうちには、わが身は、げにうけばりていみじかるべききはにはあらざりけるを、対の上の御もてなしにみがかれて、人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり。人をばまたなきものに思ひ消ち、こよなき心おごりをばしつれ、世の人は、下に言ひいづるやうもありつらむかし、などおぼし知りはてぬ。（若菜上）

このように、光源氏の、最愛の妻、実子に対する「心おごり」の戒めは、その効果の望めない十一歳の明石姫を除けば、光源氏三十九歳の物語に集中している。それ以外では、夕霧の大学入学に際し、その意図を大宮に、

高き家の子として、官爵心にかなひ、世の中盛りにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。…。なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるるかたも強うはべらめ。さしあたりては心もとなきやうにはべれども、つひの世のおもしとなるべき心おきてをならひなば、はべらずなりなむ後もうしろやすかるべきによりなむ。（少女）

と、説明したり、朱雀院女二宮との醜聞に、目の前にいる夕霧に、

さるさまの好きごとをしたまふとも、人のもどくべきさまもしたまはず、鬼神も罪許しつべく、あざやかにものきよげに若う盛りに匂ひを散らしたまへり、もの思ひ知らぬ若人のほどに、はたおはせず、かたほなるところなうねびととのほりたまへる、ことわりぞかし、女にて、などかめでざらむ、鏡を見ても、などかおごらざらむ、とわが御子ながらもおぼす。（夕霧）

と、「おごる」ことを回避すべきという認識をもっていることは確認できるが、いずれの場合も、本人夕霧には、教訓していない。なお、この両例が「心おごり」の名詞ではなく、「おごりならふ」「おごる」という動詞の使われていることが、注意される。

以上の諸例、特に光源氏三十九歳の梅枝・藤裏葉巻に見られる例からは、来たる年に老いを自覚される域、人生の区切りに至るのを前にして、末長い子孫の繁栄を庶幾して、その阻害要因となる「慢心」（後述参照）を生じさせる「心おごり」を否定し、一族に戒める光源氏の姿勢と思想がうかがわれる。

これには、一族の繁栄と安定を確認して、年来の出家の本意を実現しようという光源氏の意向とも密接に関わっているのだが、

大臣も、長からずのみおぼさるる御世のこなたにとおぼしつる（明石姫の東宮への）御参り、かひあるさまに見たてまつりなし給て、心からなれど、世に浮きたるやうにて見苦しかりつる宰相の君も、思ひなくめやすきさまに静まりたまひぬれば、御心落ちゐはて給ひて、今は本意も遂げなん、とおぼしなる。対の上の御ありさまの見捨てがたきにも、（秋好）中宮おはしませば、愚かならぬ御心寄せ也。この（明石姫の）御方にも、世に知られたる親ざまには、まづ思ひきこえ給ふべければ、さりともとおぼしゆづりけり。夏の御方の、時にはなやぎ給ふまじきも、宰相の物し給へば、とみなとりどりにうしろめたからずおぼしなり行く。（藤裏葉）

これらの「(心) おごり」「おごる」の教訓は、物語の伝統からすれば、源氏物語、光源氏の初めて行う創造なのである。

二　「おごり」の教訓

作り物語における、このような「おごり」の教訓は、源氏物語以前に見いだせない。それどころか、そもそも「おごり」「おごる」等の諸語が、そんなに使われてはいないのである。

今、古典対照語彙表その他の索引類を検して、平安時代までの主な作品の様子をみると、おごる・おごり類は、万葉集、日本霊異記、懐風藻、竹取物語、伊勢物語、古今集、土佐日記、後撰集、大和物語、蜻蛉日記、紫式部日記、和泉式部日記、栄花物語、浜松中納言物語、堤中納言物語等になく、古事記（心奢る1例）・日本書紀（驕3例、驕慢1例、奢侈1例、傲很1例）・風土記（驕1例、奢1例）以下、うつほ物語（心おごり1例）、落窪物語（心おごり1例、おごりありく1例）、枕草子（おごる1例、心おごり1例）、源氏物語（おごる7例、思ひおごる1例、おぼしおごる2例、おごりならふ2例、心おごりす7例、心おごり7例）、更科日記（心おごり2例）、夜の寝覚（おごり2例、心おごり2例、おごる3例、思ひおごる2例、おごらはし1例）、狭衣物語（おごり1例、心おごり2例）大鏡（心おごり3例）、今昔物語集（いさみおごる〈勇寵〉3例、いさみおごりかなり〈勇寵〉1例）、『新編国歌大観』（「こころおごり」のみ検索、5例）という具合で、例が拾えないか、少数例の作品が多い中で、源氏物語の計三六例、「おごらはし」の形容詞もある、夜の寝覚の一〇例が目立つ。

意味も、上代の例からほとんどすべてが、日本国語大辞典「おごる」の語義「(1)人に優越した自分の立場を当然と思う。いい気になる。得意になる。増長する。わがままにふるまう。」の意で解し得て、

難波の高津の宮の天皇のみ世、伯耆の加具漏・因幡の邑由胡の二人、大く驕りて節なく（大驕无節）、清酒を以ちて手足を洗ふ。ここに、朝庭、度に過ぎたりと爲て、狭井連佐夜を遣りて、此の二人を召さしめき。　（播磨国風土記　彌加都岐原）

同じく「(2)必要以上にぜいたくな状態になる。」の例も、わずかだが、源氏物語に見られ、

「帝王の深き宮に養はれたまひて、いろいろの楽しみにおごりたまひしかど、深き御うつくしみ、大八洲にあまねく、沈める輩をこそ多く浮かべたまひしか。　（源氏物語・明石）

同じくまた、「こころおごり」の「思いあがること。得意になること。自負。慢心。」の例も、

その野よりかへりたるに、あるざうしのごたちものいひかくるに
ももしきにうつしてううるをみなへしこころおごりのいかがせざらむ　（元真集）

とあり、「こころおごりす」の例は、さらに早く、

爾に其の嬢子、常に種種の珍味を設けて、恒に其の夫に食はしめき。故、其の（夫デアル）國主の子、心奢りて妻を詈るに（心奢

詈妻）、　（古事記、応神天皇）

と見いだせる。

こうした語義用法を持つ「おごる」「おごり」について、大野晋編『古典基礎語辞典』「おごる」項（依田瑞穂氏執筆）は、

語幹オゴは動詞アガル（上がる、ラ四）のアガの母音交替形。アガルは下から上に一足飛びに高くなる意で、低い位置にあったときとは質が変わる意を表すことがある。オゴルは、自分はかけ離れた高い所にいる者で、下の者とは質が違うと思って、人を見下す意。また、身分不相応の、あるいは度を越したぜいたくをする意。のちには、人にごちそうをする意でも使われる。

類義語ホコル（誇る）は、自分がすぐれていることに自信をもち、得意である意。

『名義抄』には、「驕・奢・誇」などの漢字に、オゴル・ホコル両訓が揚げられていることから、二語の意味的な関連を認めることができる。

と、しているが、妥当な理解であろう。『岩波古語辞典』「おごり」項では、同様の母音交替形として、さらに、オソ（遅）・アサ（浅）、コト（異）・カタ（片）、ホドロ（斑）・ハダラ（斑）を挙げる。実際の用例では、次のようなものが、これに言うオゴルの語義説明に呼応するものであろう。

わがかたたけう思ひ顔に、心おごりして、すきずきしき心ばへなど漏らしたまふな。　（源氏物語・藤裏葉）

われたけく思ひおごり、　（夜の寝覚巻五）

先に、「おごり」の教訓は、作り物語において源氏物語以前に見いだせない、と言ったが、では、教訓がどこで言われていたかというと、その歴史は古く、まずは、唐土からである。

敖不可長、欲不可從、志不可滿、樂不可極

（礼記・曲礼、引用は漢文大系による）

「敖」は色葉字類抄（前田本・黒川本）に「ヲコル」、観智院本類聚名義抄法中に「オコル」と訓がある。

鄭玄注に、「（敖・欲・志・楽）四者慢遊之道。桀紂所以自禍」とあり、敖りによる増長を戒めた。[3] 礼記は五経の一つで、一条朝では、敦成親王の御湯殿の儀に、中庸篇・文王世子篇が、敦良親王の御湯殿の儀に、文王世子篇が読まれている（御産部類記、東京大学史料編纂所データベース検索による）。源氏物語執筆との前後関係は正確には不明だが、紫式部日記筆録期間内のことである。礼記自体は月令篇を中心に、源氏物語にも踏まえられている。

ついで、史記世家篇　魯周公世家第三では、周公旦が、魯に赴く我が子の伯禽をこう戒めた。「我文王之子、武王之弟、成王之叔父、我於天下亦不賤矣。然我一沐三捉髮、一飯三吐哺、起以待士、猶恐失天下之賢人。子之魯、慎無以國驕人」（漢籍電子文献資料庫による）、「いまおまえは魯に行くが、国権をかさにきて、人に驕慢にならぬよう慎むがいい。」（世界文学大系史記による）と。「驕」は、色葉字類抄に「ヲコル」訓がある。同じく、そののち、周公旦は、成王の政治が「淫佚」に流れるのを恐れて、「多士」とともに「毌逸」を作り、その「毌逸」にはこう述べる。「為人父母、為業至長久、子孫驕奢忘

之、以亡其家、為人子可不慎乎」、すなわち「人の父母となって家業を治めるときは、いたって長久の計を立てるが、子孫は驕奢で、その業を忘れ、その家を滅ぼしてしまう。人の子として、慎まないでよいものだろうか。」と。史記のこの箇所は、源氏物語賢木巻にも、光源氏の言動に、

わが御ここちにもいたうおぼしおごりて、「文王の子武王の弟」とうち誦じたまへる、御名のりさへぞげにめでたき。成王のなにとかのたまはむとすらむ。そればかりやまた心もとなからむ。

と、「おぼしおごりて」の語句とともに引用されている。作者紫式部承知の句である。

また、白氏文集巻一風諭詩「凶宅詩」に、こうある。

我今題此詩　欲悟迷者胸　凡為大官人　年禄多高崇　権重持難久
位高勢易窮
驕者物之盈　老者数之終　四者如寇盗　日夜来相攻　假使居吉土
孰能保其躬

「私はいま、この詩を書いて、迷信にとりつかれた人々の心を悟らせたいと思う。…。驕りは物事の満ちた状態であり、老いは命数の終わりなのだから、満つれば欠け、老いては死するのが世の定めというものである。…」（新釈漢文大系による）、だから凶宅となるのも、住む人間に原因があるのである、と。この凶宅詩も、源氏物語夕顔・末摘花両巻に、荒廃した家の様に踏まえられている。

さらに、源氏物語桐壺巻に、寛平御遺誡が踏まえられていることから、明文抄巻一帝道部上に引く寛平御遺誡逸文「天子雖不窮経史百科、而有何所恨乎。唯群書治要早可誦習。」（日本思想大系による）に、帝王学として群書治要を学ぶべきこと、この条を引く禁秘抄巻上諸芸能事条に、これと合わせて貞観政要を大事としていること、その貞観政要巻一政体に、「貞観十九年、太宗謂侍臣曰、朕観古来帝王、驕矜而取敗者、不可勝数、…、（晋の武帝、隋の文帝は、呉・陳をそれぞれ滅ぼしたのち、）心逾驕奢、自矜二諸己一、臣下不復敢言、政道因茲彌紊。…。朕恐懐驕矜、恒自抑折、」（新釈漢文大系による）と、驕矜・驕奢を戒めていること、日本の臣下の戒めとしては、師輔の九条右丞相遺誡「凡為人常致恭敬之儀、勿生慢逸之心、交衆之間、用其心也。」（日本思想大系による）と、人に恭敬し、慢逸心を抱かぬようにとの戒め、等々の存在が、想起され、それぞれの源氏物語への影響も推測されるが、先に示した諸作品ほどの、確証は難しい。

三　「おごり」の教訓の創造と展望

こうして、源氏物語作者は、「おごり」の教訓の先例を、おそらく先行する作り物語においては見いだせなかったが、作者の親しんだ漢籍から学び、さらに想像される、日本の貴族社会の帝・臣・等の家訓、日常生活の見聞等から、自分のものとして、作品の中に組み込んでいったのであろう。それには当然、その戒めの採用にふさわしい、物語内の状況が作り出されたということだが、それは、先に述べた如く、光源氏からなされた、一族の最愛の妻である紫上、息子の夕霧、あまりに若年ゆえに意図のみで実行はされなかったが明石姫らに対する、

「おごり」の教訓、戒めは、光源氏三十九歳の梅枝・藤裏葉巻に集中して見られるものであった。これは、来たる年に四十歳となり老いを自覚される域、人生の区切りに至るのを前にして、末長い子孫の繁栄を庶幾して、その阻害要因となる「心おごり」を否定し、一族に戒める光源氏の姿勢と思想が想起された。

これには、一族の繁栄と安定を確認して、年来の出家の本意を実現しようという光源氏の意向とも密接に関わっているのだが、この思惟の形成には、光源氏の四十年になりなんとする物語でのそれまでの人生の体験と蓄積が基盤として、当然ながら存在していると予想される。この光源氏の人生の正確な検証は、今後の課題となるが、「おごり」の教訓という物語における創造が漢籍における実例を先蹤として、当時の貴族社会での家訓、実体験をもおそらく土壌にしながら、光源氏という虚構の人物の人生を、当時の貴族社会の現実と、物語内の現実とに対応させながら、誠実に紡いできたことで、実現が可能になったのだと思われる。常人を超越する内外にわたる資質をもって、天皇の子として生を受けながら、皇位を嗣げず、臣下として、精神・行動面でも屈折の多い人生を歩まざるをえなかった光源氏ゆえの、一つの到達点であったと見られる。「一つの到達点」、そう、だがこの「おごり」の教訓の創造で、光源氏の人生はまだ終わろうとしない。一族に「おごり」を戒めながら、彼の人生はさらに大きな峰に向かって歩んでいこうとする。そうした光源氏の人生の総体の中で、「おごり」の教訓も、また今後位置づけられなくてはならない。

〔注〕

(1)源氏物語の本文の引用は、『源氏物語大成』本文篇により、表記等を一部変え、巻名のみを記した。その他の作品の引用は、特に言及のない限り、日本古典文学大系本による。

(2)詳細は拙稿「藤裏葉巻『残り給はむ末の世などのたとしへなき衰へなどをさへ思ひはばからるれば』攷」(『文学部論集』(佛教大学)第93号　二〇〇九年三月、参照。

(3)ホコルの例だが、老子第二十四章にも、「自伐者無功、自矜者不長」とある。

(うえの　たつよし　日本文学科)

二〇一九年十一月十五日受理